

ARGUS de la PRESSE

21, Bd Montmartre — 75002 PARIS

Tél. : 742-49-46 - 742-98-91

No de débit

朝日ジャーナル

ASAHI JOURNAL (W)

Paris Biennale

'77. 6. 3

Japan

A

高いレベルを示した榎倉康二の個展

美術界には、文学の芥川賞に類する新人登竜門がない。一〇年ほど前までは、毎日新聞主催の現代日本美術展のコンクール部門で大賞をとるということは、当人にとっても大きな出来事だったし、また美術の新しい動向を一般が知るうえでの一つの目安でありえた。いまや、このたぐいのコンクールが軒並み権威を失って、一〇〇万円、二〇〇万円といった賞金インフレのみが時勢をうかがわせるありさま。質のレベルがどのへんにあるのかさえ容易に分からぬ状況となっている。権威主義と商業主義に支えられた登竜門などはない方がいいのだ、というタテマエ論に立つなら、この状況もなんら不都合ではないわけだが、現実には、無力な批評が二流、三流の作品に対して無定見な言葉遊びを弄するほかないような、どうにもシマラナイ状況になっているのである。ことしの毎日現代展の大賞作品とか、松屋で開かれた第一回版画大賞展の受賞作など、賞金ももつたいなくなるような程度の作品だ。無理に大賞など出さずに、ほかに有効な使い道を考えたらどうだろうか。

だが、ありがたいことに、巷で散

見する細々とした発表活動が、すべてこの程度というわけではない。五月半ば、日本橋の真木画廊で行われた榎倉康二の個展は、レベルの高い仕事を黙々と続けていた若い作家がいることを知らせてくれた一つの好例であった。ことし三五歳。一九七〇年に東京ビエンナーレ、翌年にパリ・ビエンナーレに招待出品したほか、これといった晴れがましい舞台に恵まれずにきた人だが、油煙を布に染みこませることを基本にした独自の物質との対話の仕方には定評がある。

特定のグルーブや議論との結びつきがなく、言葉にしにくい仕事をもの静かに提示するだけだから、当世風の情報網には乗りにくからう。しかし、いまのような中心喪失の時代には、こういう質の高い仕事が見る者を捉えてくる。

榎倉はパリ・ビエンナーレ参加が機縁で西独アーヘンの市美術館で個展を開き、成功している。日本でこういう作家がなぞもつと大切にされないのか。この世代の美術家がいつまでも冷や飯を食わされているようでは、一〇〇万、二〇〇万の大賞など、しよせんあだ花にすぎまい。(剣)

